

室 報



「季刊三千里」解題集

◀目次▶

雑誌『季刊三千里』と東アジアの架橋 ……	2	書評『繊細すぎてしんどいあなたへ HSP相談室』 ……	11
マインドフル・ドラミング ……	5	次号予告、編集後記 ……	12
トランスジェンダーを語りなおす ……	8		

雑誌『季刊三千里』と東アジアの架橋

～翰林大学日本学研究所による解題作業について～

村島 健司

韓国北東部江原道春川市にある翰林大学日本学研究所では、2017年より韓国研究財団人文韓国プラス（HK+）の事業として、「ポスト帝国の文化権力と東アジア」と題する7年計画の大型共同研究に取り組んでいる。当事業には人文学を中心に学内外から30名弱の研究者が参画し、今日の東アジア地域における相互不信と嫌悪の原因を探り、和解と協力という未来志向の東アジアのための人文学的な見通しを樹立することが目的とされている。

本コラムでは、翰林大学日本学研究所が共同研究事業のひとつとして進めている、1970年代から80年代にかけて、日本で発行された在日コリアンの雑誌である『季刊三千里』の解題作業について紹介する。

『季刊三千里』

雑誌『季刊三千里』は、在日コリアンの歴史学者である李進熙、朴慶植、姜在彦、そして作家の金達寿、金石範、李哲、尹学準を編集委員として、1975年2月に創刊された雑誌である。雑誌は東京都新宿区西大久保にあった三千里社を発行元に、1987年5月に終刊を迎えるまで、12年間で計50回にわたって発行された。「三千里」という名称や雑誌の役割について、創刊号冒頭「創刊のことば」では以下のように述べられている。

朝鮮をさして「三千里錦繡江山」ともいう。「麗しい山河の朝鮮」という意味である。雑誌『季刊三千里』には、朝鮮民族の念願である統一の基本方向をしめした1972年の「七・四共同声明」にのっとった「統一された朝鮮」を実現するための切実な願いが込められている。

一衣帯水の関係にあるといわれながらも、朝鮮と日本とはまだ「近くて遠い国」の関係

にある。われわれは、朝鮮と日本との間の複雑によじれた糸を解きほぐし、相互間の理解と連帯とをはかるための一つの橋を架けて行きたい。（『季刊三千里』創刊号：11頁）

『季刊三千里』は組織の機関誌ではなく、三千里社を発行元とする、当時としては珍しい、民間の雑誌であった。編集委員のほか執筆陣も在日コリアンが中心でありながら、大江健三郎、司馬遼太郎、飯沼二郎、日高六郎など、日本人の著名な文学者、歴史家、活動家などの知識人も多数、執筆者として参加している。また、本人権問題研究室人種・民族問題研究班に所属する飛田雄一も、当時いくつかの記事を執筆している。（写真1）（写真2）



写真1



写真2

『季刊三千里』に掲載された記事は、韓国や日本をはじめとする東アジア情勢の分析、歴史問題、在日コリアンの文化と日常、差別問題、日本人による植民経験と朝鮮体験など、様々なテーマで構成されている。こうした点で『季刊三千里』は、1970年代後半から1980年代にかけての冷戦時期東アジアにおける韓国や北朝鮮と日本の関係、そして世代交代が進む日本社会の中の在日コリアンの変化を検討するのに有用な資料である。

しかしながら、『季刊三千里』の記事はすべて日本語で執筆されているため、韓国国内では必

ずしもその内容が十分に認知され、また研究分析の対象とされてきたわけではない。そこで、「ポスト帝国の文化権力と東アジア」を共同研究のテーマに掲げる翰林大学日本学研究所によって、記事の内容を韓国語で解題し、今後の研究に向けたアーカイブとするための作業が始められることになった。『季刊三千里』解題作業の成果は、韓国社会や日本、さらには東アジアの中で解決すべき「国民国家」の問題や「単一民族と多民族」の問題を考えさせる契機となり、特に既存の先行研究が読み取れなかった「在日コリアンの世界観」、「主体論」、「南北共同体論」、「戦後民主主義論」、「東アジア談論」を分析し、既存の冷戦と脱国家主義問題」の新たな確立に寄与することが目指されている（翰林大学日本学研究所編『季刊三千里解題集』第1巻：6頁）。

（写真3）



写真3

解題作業とその対象・方法

解題作業では、『季刊三千里』各号の中から、「巻頭対談」、数本のエッセイから構成される「架橋」、時事問題を中心とした「論説」、「サークル紹介」、読者投稿欄に相当する「おんどるばん」、そして「編集後記」を中心に解題の対象とする記事を選定する作業から始める。記事の選定にあたっては、共同研究のテーマに則しながら、①東アジアにおける相互理解の促進に関するもの、②当時の東アジア関係や国際情勢に関するもの、③朝鮮と在日コリアンの日常文化に関するものが各号10本程度選定され、各担当者がそれぞれの記事の要約および解説を執筆する。翰林大学日本学研究所では、これまでに創刊号から第21号までを対象に251本の記事を取りあげ、『季刊三千里解題集』シリーズ第3巻までの刊行を果たしている（表紙写真）。解題作業は2020

年度以降も続けられており、第22号以降を対象とした解題集も順次出版される予定である。

ここでは、その中から1975年11月に刊行された『季刊三千里』第4号を取りあげてみたい（『季刊三千里解題集1』111頁-137頁）。第4号からは、久野収と金達寿による対談「相互理解のための提案」、「架橋」欄から「朝鮮人の『優しさ』」（飯沼二郎）、「網走で会った人のことなど」（西野辰吉）、「ぼくの朝鮮経験は」（西順蔵）の各エッセイ、「[サークル紹介] 神戸学生・青年センター」、時事問題を扱った論説として「アメリカの核戦略と日韓軍事関係」（藤井治夫）、「おんどるばん」、「編集後記」などの記事が解題の対象として選定され、それぞれ要約や解説が行われている。

「対談」は、創刊号から第8号までの各号にて、編集委員である金達寿が、鶴見俊介「激動が生みだすもの」、中野好夫「ナショナリズムについて」、司馬遼太郎「反省の歴史と文化」、久野収「相互理解のための提案」、野間宏「朝鮮文学の可能性」、日高六郎「体制と市民運動」、和歌森太郎「日朝関係史の見直し」らと、「」内のテーマでそれぞれ対談し、それを収録したものである。この「対談」は、その多くが巻頭に配置されており、各号の目玉記事であると言える。また第9号以降も、鼎談や座談会のかたちで多くの知識人が意見を交わし、その内容が収録されている。

「架橋」とは創刊号から最終号まで一貫して設けられている項目であり、朝鮮と日本のあいだに連帯の橋を架けることを主旨とした『季刊三千里』の根幹をなすものである。「架橋」には、さまざまな立場の執筆者が記事を寄稿しており、解題作業ではすべての号において、「架橋」に掲載された記事を抽出し、内容の解説を行っている。

次の「サークル紹介」は、朝鮮や在日コリアンに関する日本のサークルが不定期に紹介され、第4号では飛田雄一が現在理事長をつとめる「神戸学生・青年センター」が取りあげられている。また「おんどるばん」とは、朝鮮家屋独特の暖房装置を意味するが、ここでは読者が投稿を通して編集者と居心地よく交流する場として名付けられている。第4号では、読者から「幻でない『架橋』を」、「朝鮮史を学びたい」、「もっ

と現実を重視すべきだ」などの意見が寄せられ、解題作業では、こうした読者による投稿や編集後記についても、毎号抽出して要約している。知識人による時事問題や歴史問題などについての論考だけでなく、朝鮮に関するサークルの紹介や読者の声などを取りあげることによって、在日コリアンを取り巻く当時の社会のリアリティを整理して解説することが目指されているからである。(写真4)(写真5)



写真4



写真5

解題作業とその後のさらなる成果に向けて

翰林大学日本学研究所による解題作業の成果としての『季刊三千里解題集』では、選定した記事を韓国語で要約してはいるが、記事に対する分析や考察などは行われていない。これは、あくまでも解題作業がアーカイブの作成を目的として実施されているからである。

もっとも、作業チームの参加者は解題作業と並行しながら、各自の研究関心や研究領域に基づいて、アーカイブした記事を用いた分析作業に着手している。その過程で、2019年5月に『季刊三千里』解題作業成果報告ワークショップ～『季刊三千里』の世界性と共同体論～、2020年1月に『季刊三千里』解題作業現況共有ワークショップ～「研究方法論」拡張の可能性模索について～とそれぞれ題したワークショップを開催している。ワークショップでは、以下の研究発表があった。

『季刊三千里』に交差する四つの空間：朝鮮、韓国、在日、日本、そして主体」

『季刊三千里』と『在日』世界の展開」

『季刊三千里』から見た日本の進歩的知識人の在日朝鮮人観」

『季刊三千里』とNHK 朝鮮語講座：ディアスポラメディア共同体」

「相生通りからの架橋：『季刊三千里』における被爆朝鮮人記事を読む」

これらの発表のうち、いくつかはすでに論文として研究雑誌に掲載されるに至っている。今後は、実際に解題作業に関わった者たちだけでなく、『季刊三千里解題集』を通して、韓国においても『季刊三千里』への認知が広がり、さまざまな角度や立場から分析されていくことになるだろう。

雑誌『季刊三千里』における、「朝鮮と日本との間の複雑によじれた糸を解きほぐし、相互間の理解と連帯とをはかるための一つの橋を架け」という挑戦は、創刊から半世紀近く経つ今日においても、依然として東アジアの課題として残っている。翰林大学日本学研究所による一連の解題作業が、こうした課題を克服するための新たな架橋になるだろうか。

(委嘱研究員／韓国翰林大学日本学研究所
HK研究教授)

(写真1：『季刊三千里』創刊号表紙)

(写真2：飛田雄一による論稿「入管令改正と在日朝鮮人の在留権」(『季刊三千里』第28号))

(写真3：翰林大学日本学研究所に所蔵されている『季刊三千里』。研究所の初代所長である池明観は、「T・K生」の名で雑誌『世界』に「韓国からの通信」を連載したことで有名で、民主化運動家としても知られている。研究所には「池明観先生に本を贈る会」から寄贈された『季刊三千里』各号が所蔵されている。)

(写真4：『季刊三千里解題集』第1巻「対談・相互理解のための提案」)

(写真5：『季刊三千里解題集』第1巻「[サークル紹介] 神戸学生・青年センター」)

マインドフル・ドラミング

串崎 真志

コロナ時代のセルフケア

心理学では、人を社会的な動物 (social animal) と定義する。それゆえ、社会的距離を保つこと (social distancing) は、感染症の拡大防止に必要であるものの、私たちにかんがりの我慢を強いるだろう。人は気持ちに余裕がなくなると、他者に対して不寛容になりやすい。加えて、将来の見通しが立ちにくい状況が長期化している。他者に対する心無い言動や、相手を過度に責めるような、ぎすぎすした関係も増えていると感じる。日本心理学会のウェブサイトには、ストレスマネジメントの重要性が説かれ、差別や偏見が起ころぬよう注意喚起がなされている。

心理学的にいうと、気持ちを落ち着かせるためのセルフケア (self-care tips for stress management) が必要だ。マインドフルネス (呼吸法) やリラクゼーションといった、心理学らしい方法でなくても、よいだろう。それぞれが自分を大切にできる活動と時間を確保することで、気持ちの余裕の回復に努めたい。

そして私たちには、危機に立ち向かう力がある。例えば、オンラインでの会議や学習は、多くの人が初めて挑戦したことではないだろうか。これを機に、今までできなかった活動や、やってみたかったことを始めた人もいると聞く。外出を控える状況は、ライフスタイルの見直しを余儀なくしたが、できればそれを前向きな力につなげたい。心理学では、これをレジリエンス (resilience) と呼んでいる。

気持ちを落ち着かせる方法の一つとして、本稿ではドラム演奏 (drumming) を取り上げてみたい。ドラムが唐突に登場して驚いたかもしれないが、ここでいうドラミングは、ドラムセットを上手に演奏できることとは異なる。考えてみると、すべての人は小さなドラム、つまり心臓の鼓動 (heartbeat) をもっている。その生きるリズムに気づき、身を委ねることは、私たちに安らぎと変化を生むだろう。そのような意味での、動作ではなく、気持ちとしてのドラミングで

ある。

ドラムサークル

そもそもドラム (ドラムセットも含めた打楽器類を指す) には、気持ちを高めたり落ち着かせたりする作用がある。音楽療法 (music therapy) では、さまざまな楽器の一つとして、ドラムが取り入れられてきた(1)(2)。また、ドラムサークル (drum circles) といって、皆が輪になって太鼓類を持ち、即興的な合奏を行うコミュニティ活動もある(3)。パーカッションist Arthur HullのVillage Music Circlesが有名だ(4)(5)。ドラムサークルは近年、幼児教育にも取り入れられている(6)。

北米では、パーカッションの製造会社REMOが、神経学者のBarry Bittmanや音楽療法士のChristine Stevensと開発したHealth RHYTHMS (登録商標) というプログラムがある(7)。これは、ストレス低減やコミュニケーションを目指した集団エンパワメントドラミング (group empowerment drumming) であり、近年は組織のチームビルディング (team building) の方法としても導入されている。

治療的ドラミング

治療的ドラミング (therapeutic drumming) は、補完療法の一つとして、病院で実践される活動をいう。例えば、がん(8)、パーキンソン病(9)、精神疾患をもつ患者が(10)(11)、思い思いに太鼓に触れることで、自信 (confidence) や主体感 (agency) や所属感 (sense of belonging) を得られることが報告されている。患者だけではなく、ケアに疲れたソーシャルワーカー(12)、ケアワーカー(13)、メンタルヘルス・プロフェッショナル(14)、児童青年精神科病棟のスタッフにも(15)、ドラミングは力になる。

子どもたちには、特に効果を期待できそうだ。ロサンゼルス の低所得地区の5年生(16)、オーストラリアのリスクのある中学生(17)(18)、カナダの精神疾患で入院している子どもたちに関

する報告がある(19)。そしてドラミングは、一般の大学生(20)、レクリエーション・セラピー(recreation therapy)の課程(21)、看護学生(22)、トランスパーソナル心理学(transpersonal psychology)の授業の一環としても取り入れられている(23)。

効果のメカニズム

ドラミングの効果は、単なる気分の変化だけではない。例えば、精神疾患をもつ患者の免疫(cytokines interleukin 4)が上昇したり(24)、児童心理療施設の小中学生男子に和太鼓を指導したところ、唾液オキシトシン(salivary levels of oxytocin)の分泌が上昇したり(25)、シャーマニックなドラム(shamanic drumming)のCDを15分間聴くと、唾液コルチゾール(salivary cortisol)の分泌が減少したりする(26)。これらは、ストレス低減・緩和効果がドラミングにあることを意味している。

また、12歳の脳梁欠損症(agenesis of the corpus callosum)の子どもに、ドラムセットでルーディメンツを練習(rudimentary drumming exercises)してもらうと、運動機能(motor skills)が回復したという報告もある(27)。ドラムが脳のトレーニングにいいと言われるのも、この延長にあるのだろう。

それにしても、ドラミングはなぜそのような効果をもたらすのだろうか。その説明として、第一に、対人同期(interpersonal synchrony)説がある(28)(29)(30)。例えば、二人でドラミング(dyadic drumming)すると、脳内の神経伝達物質エンドルフィン(endorphin)が上昇し、痛みに対する閾値が上がる(感じにくくなる)という(31)。そして、右脳の側頭頭頂接合部(temporo-parietal junction)の活動(32)、尾状核(caudate)の活動が増加する(33)。これらは、ドラミングを通して、お互いが積極的に関わっている状態を意味する。カナダの臨床心理士 Shari Gellerは、このような生理的変化も含めて、二人の気持ちが重なることを、治療的存在感(therapeutic presence)と呼んだ(34)(35)(36)。人とリズムを合わせること(attunement)そのものが、人を前向きにするのである。

第二に、ドラミングは両手を交互に動かすという特徴がある。これを両側性刺激(bilateral

stimulation)という。例えば、両側性刺激によって前頭前野の血流が低下するという報告がある(37)。これは、リラクゼーションや心地よい感情(relaxation and comfortable feelings)が生じている状態を意味する。すなわち、両側性刺激そのものが、気持ちを落ち着かせるかもしれないのだ(研究はまだ少ない)。例えば、そのようなタッピング(butterfly hug)が、外傷後ストレス障害(posttraumatic stress disorder)の治療などに導入されている。

繊細な人のためのドラミング

最後に、繊細な性格をもつ人(highly sensitive person)のセルフケアとしてのドラミングについて考えてみたい。繊細な人は、物事を深くうけとめる反面、気疲れしやすい(38)。それゆえ、大勢で集まって、感情を解放する(emotional release)ようなドラミングよりも、2～3人で黙々とリズムを刻むようなドラミングのほうが適しているだろう。前述のShari Gellerは、その実践(Therapeutic Rhythm and Mindfulness)において、心身の調和を作る(to create harmony in the mind and body)ドラミングを、マインドフル・ドラミング(mindful drumming)と呼んでいる(39)。以下に要約してみよう(p.118, p.123)。

まず一人で、心臓・首・手首に手を当て、脈を感じてみる。次に、その鼓動に合わせて、片手で机を優しくタップする。心地よく自然に感じるようになったら、自分の呼吸のリズム(吸う・吐く)に合わせてタップする(10分間)。次に二人で向かい合い、お互いに相手の呼吸(腹・胸)の動きに注意を向ける。これを呼吸同調(breath entrainment)という。そして、楽器を手にして、自分の内側を感じながら、二人の間に現れる会話をリズムで表現するように、優しくリズムを刻んでみる(5分～10分間)。気持ちが盛りがっても、最後は音量やテンポをソフトにして終わる。

私は、このマインドフル・ドラミングのあとで、鼓動に近いテンポ(メトロノーム60～70)に合わせて、一般的な基礎練習(四分音符・八分音符等)を黙々と行うのが、気持ちを落ち着かせるのによいと考えている。データはないが、一人あるいは二人で、メトロノームにマインド

フルに合わせていくことは、淡々とした気持ちよさにつながると思われる。

コロナ時代のセルフケアは、遠隔コミュニケーションが中心になるだろう。オンラインのドラマ・レッスンも可能になっているようだ。通信環境によっては、多少のタイムラグはあるかもしれないが、工夫の一つとして活用していきたい。

文献

- 1 <http://id.nii.ac.jp/1074/00001485/>
- 2 DOI: 10.1093/mtp/miv049
- 3 DOI: 10.1386/ijcm.10.2.139_1
- 4 harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hbg/metadata/9510
- 5 <https://www.researchgate.net/publication/288972008>
- 6 <http://id.nii.ac.jp/1419/00001050/>
- 7 DOI: 10.1080/09687630500342881
- 8 DOI: 10.1080/16078055.2019.1611629
- 9 DOI: 10.1007/s10615-015-0552-3
- 10 DOI: 10.1080/17482631.2018.1484219
- 11 DOI: 10.1186/s13612-016-0048-0
- 12 DOI:10.1080/17533015.2012.748081
- 13 www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/14686266
- 14 DOI: 10.1016/j.explore.2011.02.015
- 15 DOI: 10.1177/0081246315581346
- 16 DOI: 10.1093/ecam/neq072
- 17 DOI: 10.1108/JPMH-09-2012-0002
- 18 DOI: 10.1017/cha.2017.40
- 19 DOI: 10.1080/17533015.2018.1536673
- 20 DOI: 10.1016/j.aip.2014.04.008
- 21 <https://eric.ed.gov/?id=EJ1223593>
- 22 DOI: 10.2202/1548-923x.1044
- 23 DOI: 10.24972/ijts.2010.29.2.1
- 24 DOI:10.1371/ journal.pone.0151136
- 25 DOI: 10.3390/brainsci7110152
- 26 DOI: 10.1371/journal.pone.0102103
- 27 DOI: 10.1177/0898010119871380
- 28 DOI: 10.1007/s11612-019-00450-8
- 29 DOI: 10.1037/a0038980
- 30 DOI: 10.1037/a0021818
- 31 DOI: 10.3389/fpsyg.2017.01034
- 32 DOI: 10.1093/scan/nsy076
- 33 DOI: 10.1371/journal.pone.0027272
- 34 DOI: 10.1037/a0037511
- 35 DOI: 10.1037/13485-000
- 36 DOI: 10.1037/0000025-000
- 37 DOI: 10.1371/journal.pone.0162735
- 38 <http://hdl.handle.net/10112/00019920>
- 39 ISBN: 978-1-324-00050-1

(文学部教授)



写真1 マインドフルドラミング



写真2 基礎練習のスコア

「トランスジェンダーを語りなおす」

きんきトランス・ミーティング——イベント記録

堀 あきこ

1. はじめに

2020年2月9日（日）、関西大学梅田キャンパス大ホールにて、トランスジェンダーや多様な性を生きる人が安心して暮らせる社会のための活動を行うグループ「きんきトランス・ミーティング」（以下、KTMと略）が、関西大学人権問題研究室、守如子研究室、井谷聡子研究室の後援をうけ、イベント「トランスジェンダーを語りなおす～マイクロアグレッションって？」を開催した。

イベントは、守如子さん（人権問題研究室研究員）による挨拶からはじまり、次いで、司会の堀あきこ（人権問題研究室非常勤研究員、筆者）がKTM設立経緯とイベントの趣旨説明を行った。KTMは、2018年7月のお茶の水女子大学によるトランスジェンダー学生受け入れ声明発表以降、インターネット上においてトランスフォビア（トランス嫌悪）が活発化したことへの懸念から設立されたグループである。

ネット上で盛んになったトランス嫌悪・排除の書き込みは、トランスジェンダーに関する基礎的な知識がまだ一般的に広がっていないことを感じさせるものが多く、トランスパーソンが直面している日常生活の困難や、多様なジェンダー・セクシュアリティのあり方について理解が深まっていない日本社会の現状が顕在化したものだといえる。お茶の水女子大学のトランスジェンダー学生受け入れについて、SNSでは「トランス女性と性犯罪目的の女装男性とは見分けがつかないから、トランス女性の女子大入学を許可すると、女子学生が危険な目に遭う」といった主張がなされた。シスジェンダー女性の「恐怖」を盾に、トランス女性を潜在的な犯罪者のように語る言葉や、トランス女性を男性として語る「ミスジェンダリング」が繰り返され、差別への対抗言説も数多く書かれたのだが、収まる気配はなかった。そんな中、ツイッターに「オ

ンラインだけでなく、オフラインでトランス差別に抗うことをしませんか」という投稿があった。この投稿に賛同した、主に関西在住の有志が集まり、トランスジェンダーの人権問題への理解を深める活動を行うことを目的として2019年12月に設立されたのがKTMである。本イベントは、2020年2月に韓国の女子大学で入学試験に合格したトランス女性が、激しい反対運動にあって入学を諦めざるをえなかった事件が起こったこともあり、複数の報道取材が入り、135名もの参加者が集まるなど高い注目を集めた。

登壇者は、井谷聡子さん（人権問題研究室研究員）、りぼたんさん（中西祐貴、大学院生）、遠藤まめたさん（にじーず）の3人。それぞれの講話の後、会場からの質問を受けたクロストークが行われた。本稿は、イベント時の配布資料などをもとに、筆者がイベント記録としてまとめたものである。

2. 登壇者による講話

【井谷聡子さんのお話】

井谷聡子さんからは、ジェンダー・セクシュアリティについての基本的な概説と、マイクロアグレッションについての説明がされた。性には、生物学的な性、性自認、性的指向、性表現の4つの要素があること、トランスジェンダーは出生時に振り分けられた性別に違和感があったり、異なる性自認を持つ人であることが示された。マイクロアグレッションとは、1970年代に提起された言葉で、60年代の公民権運動を経て変化しつつあった人種差別の異なる現れ方やその効果を分析する新たな概念として生み出された。あからさまではないけれど差別的な言動を指す。曖昧な差別であるため、直接的な差別より指摘しづらく、マイクロアグレッションを受けた側もそれが差別であるのかどうか判断しづらいという特徴がある。

マイクロアグレッションは些細なこととされがちで、怒りを表明すると過剰な反応と言われてしまう場合もある。たとえば、アメリカで生まれ育ったアジア系アメリカ人に対し「英語が上手だ」と褒めた時、発話者に差別意識がなくても、言葉を受けた者にとっては自分の経験や感情といった現実が無化されてしまう。無自覚に発せられることから、日常生活でしばしば経験され、かつ長期にわたるため大きなダメージとして蓄積されていく。マジョリティは何がマイノリティを傷つけているのか理解できず、現状認識に差がつき、マイノリティは過剰反応と言われたり、感情的爆発が起こった場合にステレオタイプの強化につながってしまうこともある。被害としては、生物学的影響、メンタルヘルスへの影響、教育・雇用・健康の機会へのアクセスへの影響がある。

【りぼたんさんのお話】

りぼたんさんからは、トランスジェンダーに起こるマイクロアグレッションについて、経験に基づく事例が紹介された。りぼたんさんは、トランス女性であることを明示しているにも関わらず、「彼」という代名詞を使われること（ミスジェンダリング）があるという。また、トランスジェンダーであることをカミングアウトした際、「私はいいと思う」という言葉を聞くことがあるが、「いい」という判断を出来る立場とは何なのか、「私は」という言葉には「いいと思わない人もいるのではないか」という含みを感じられる、と説明があった。そして、2015年の文科省通知には、性同一性障害に係る児童生徒への対応として「職員トイレ・多目的トイレの使用を認める」と書かれているが、性自認にそったトイレが使用できないことは「配慮の皮をかぶったマイクロアグレッションがあるのではないか」という問いかけがなされた。

【遠藤まめたさんのお話】

遠藤まめたさんは、「〇〇人を殺せ」という言葉はよくないという共通認識はあるが、マイクロアグレッションの場合、ある人は差別ととらえ、ある人は考えすぎだととらえるため、いま必要なのは、具体的な細かな話をしていくことだ、としてトランス男性の立場からの経験を語っ

た。遠藤さんは、小学校時代、ランドセルは赤か黒、セーラー服の制服しかなく、非常に苦痛だったという。その経験を話すと、シスジェンダーの人から「私も嫌だった」「私もスカートをはきたくなかった」という言葉が返ってくる。しかし、遠藤さんの経験とシスジェンダーの人の経験は違うものだろうし、「同じ」とか「分かる」とか言わないでほしい、と語る。「男子の制服が着たかった」という思いと、「スカートが嫌だった」という経験の異なりが、「同じ」「分かる」という言葉で無いもののようにされてしまうことも、分かりづらいマイクロアグレッションではないかと説明された。

3. 質疑応答から

「どういう風にしたら（マイクロアグレッションの）ダメージを受けないようにできるか」という質問に、「自分のおかれている状況が酷いものであると認識することが大事だ」という答えがあった。また、マジョリティの立場から「傷ついた人をみた場合、どういう風にケアすればよいか」という質問には、「隣に座ってくれているだけでいい。具体的に解決策を示してくれなくても、励みになります」という答えがあり、「周りにいる人がマイクロアグレッションをまず止めることが必要」という意見もでた。

4. 結びにかえて

アンケートには多くの参加者から、トランスジェンダーの排除を人権問題として考えることの必要性が書かれていた。マイクロアグレッションを受けている人たちからは、「無意識であったり、悪気がなかったりする言葉に傷つき、疲弊している実感がある」という語りが多く見られた。「この実感を、マイクロアグレッションというのだと知れてよかった」という言葉や、「知らないことがたくさんあった」という意見から、このような学びの場が必要であることを実感した。また、さまざまな年代の関大卒業生が参加されており、たくさん声をかけていただいた。「母校が人権を大切に、こうした催しをしていることを誇りに思う」と言ってくださった方がいたことを記しておきたい。

(非常勤研究員)



写真1 左から、司会：堀あきこ、登壇者：井谷聡子、りばたん、遠藤まめた



写真2 当日の会場の様子

書評

串崎真志著

『繊細すぎてしんどいあなたへ HSP相談室』

(岩波ジュニア新書 2020年5月)

評者：加戸 陽子



本書は近年、HSP (Highly Sensitive Person) / HSC (Highly Sensitive Child)、繊細さん、繊細な人、敏感すぎる人、などと表現される人々やその周囲の人々に向けた特性理解と向き合い方を伝えるものである。特に、心身の成熟が著しく、自分自身への関心が高まり、対人関係が深まる10代の読者とその保護者や教師、その他の相談相手となりうる人々に向けて書かれている。著者は臨床心理学を専門とし、同氏も理事の一人として2018年に設立したNPO法人「寺子屋ひゅっげ」では、HSP/HSCをはじめ、さまざまな生きづらさに対する心理的支援を行い、本研究室の障害研究班の委員として本研究室紀要にもHSP/HSCをテーマとする研究報告を精力的に行っている。以前、評者は著者のHSP/HSCに関する講演会に参加する機会を得たが、講演後、教育関係者や保護者からの質問や相談が後を絶えない状況を目の当たりにし、当該領域への関心の高さを改めて実感した。

本書で取り上げられている“繊細さ”は疾患ではない。それゆえにHSP/HSC当事者にとって、日々の生活の中で生きづらさとして自覚されるものの、誰かに相談したり、本特性が長所になりうるという認識にはいたりにくい。米国では5人に1人がHSP/HSCに該当するとされ、多くの人が持ち合わせる要素であるが、その繊細さにはタイプの違いや程度の差があり、中には強い「生きづらさ」の水準に至る人もいる。このような多様性は、個々の困難への理解が得られにくい背景になっているものと推測される。他者との違いに漠然と不安を感じ、悩むことの多い10代の人々において、さらにHSP/HSCの特性がある場合には、捉えがたく説明しがたいこの悩みに対処できず、孤独を募らせることになるだろう。評者も臨床活動を行う中で、学

校に行きづらい、なじめず過ぎにくさを感じる神経発達症を抱える子どもたちに出会うことは少なくないが、その居心地の悪さの訴えの中には主症状のみでは説明がつかないものを感じることがあった。HSP/HSCを知ることで、主症状に加えてこのような特性を抱えている可能性も念頭に対応することの必要性に気づかされた。また、保護者の中には既に自ら情報を収集し、我が子には神経発達症だけではなくHSCの特性もあると感じ、我が子への理解に活かしておられる人もいた。

本書は三章で構成され、1章では10代に見られやすい6タイプの繊細さに関する解説、2章はタイプ別の対処方法、3章では当事者・非当事者に向けた相談の方法や繊細さの受け止め方についての視点や具体的なアドバイスが述べられている。個人が取り組める手法から、専門機関でのカウンセリングの受け方まで、具体的なイメージをもつことのできるアドバイスがなされており、臨床にもたずさわる著者の当事者に対する細やかな気遣いも感じられる。

著者は、“繊細さ”は物事を深くとらえる「多感さ」という「力」であり、その「力」を理解し、上手くコントロールできるようになれば自身の個性に深みを与え、人生を切り拓く上での心強い味方になるものであると力強いメッセージを送っている。本書を通じて読者は自身の特徴や過去の経験をみつめなおし、否定的要素としての認識を変え、自身をマネジメントし、周囲への理解の求め方を知ることができるであろう。また、教育関係者や支援者がHSP/HSCを個人の多様性を成す要素の1つとして理解する手がかりとなるであろう。

(文学部教授)

次号予告

「特集：新型コロナウイルスの時代と人権」(仮題)

世界を覆うパンデミックという未曾有の出来事に直面し、当人権問題研究室の研究者はそれぞれどんなことを感じているのか。

何が正解かわからず、いろいろな問題が生じ、先の見えにくい中、手探りで私たちは進まねばなりません。そこには人権研ならではの視点もあるはずです。

委嘱研究員の松波めぐみさんは、自立生活をする障害者を介助するなかで、さまざまなことを考えたといいます (Yahoo!ニュース2020年6月14日[1])。基本的な生活場面で他人を自宅に入れざるをえない人々は、感染症そのものだけでなく、もし感染した場合のバッシングにも恐怖している。ヘルパーの側も、自分が相手に移してしまうかもしれないという、大きな緊張のなかで悩んでいる。リスクと権利と自由のバランスを、一人一人が考えていかざるを得ないといいます。

次号66号では、このようなエッセイや論考など、研究者の思いを綴る特集を検討しています。ささやかな取り組みながら、このような時こそ、本特集が意義あるものになればと考えています。

[1] 長瀬千雅・松波めぐみ 先の見えない恐怖を味わった——濃厚接触を避けられない訪問介護の現場から

<https://news.yahoo.co.jp/articles/8a09c93f2b47777ef098d8505fe9f1dfc45f1d6b>

編集後記

本第65号では、3本のエッセイと1本の書評を掲載している。

村島研究員 (人種・民族問題研究班) は、1970年代から80年代にかけて日本で刊行された在日コリアンの雑誌『季刊三千里』の改題作業を通じて、「和解と協力」という未来志向の東アジアの関係構築をめざす人文学的なアプローチについて紹介している。串崎研究員 (障害研究班) は、気持ちを解放させたり落ち着かせたりする「セルフケア」の試みとして、「マインドフル・ドラミング」を紹介している。また、堀研究員 (ジェンダー研究班) は、トランスジェンダーをはじめ多様な性を生きる人が安心して暮らせる社会のための活動を行う「きんきトランス・ミーティング」による「トランスジェンダーを語りなおす～マイクロアグレッションって？」のイベント報告を行っている。加戸研究員 (障害研究班) は、若い世代に向けたメッセージともいえる『繊細すぎてしんどいあなたへ HSP相談室』(串崎研究員著)の書評を行っている。いずれも多様な社会文化的背景を持つ私たち一人ひとりが安心して生きていくことのできる自己と社会のあり方を探究する試みである。

新型コロナウイルス感染症の流行により、私たちの命と生活が脅かされ、新しい社会の在り方が模索される中、関西大学人権問題研究室でも研究者が集まることもままならず、研究学習会や公開講座の中止を余儀なくされるなど、その活動に大きな影響を受けている。9月後半から始まる秋学期からは、対面およびオンラインを併用しての研究学習活動に取り組んでいく用意をしているところである。この間の新型コロナ禍においても「社会的弱者」が高いリスクを被りがちであったり、コロナウイルスにかかわる差別事象が少なからず発生したりしている。人権問題研究室としても、こうした人権課題を明らかにし、解決への道筋を探る実証的・実践的な活動を行っていきたいと考えている。その一端は、「次号予告」にあるように第66号でお示ししたい。

(若槻 健)

関西大学人権問題研究室室報 第65号
2020年9月30日発行
発行／関西大学人権問題研究室
〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号
電話 (06) 6368-1182
FAX (06) 6368-0081
<http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>